静岡自治研コンセプト

ちょっと始めてみませんか？ やらざあ、自治研ルネサンス！

自治研中央推進委員長
青木真理子
あおき・まりこ
一九八五年旧斐川町（ひかわちょう）役場に入職（斐川町は二〇一一年に合併により出雲市）。建設課、生涯学習課、ふるさとデザイン課、企画財政課で勤務し、二〇〇〇年島根県本部女性部副部長・連合島根女性委員会委員長、二〇〇七年島根県本部副委員長（専従）、二〇一一年自治労本部執行委員（総合組織局→総合企画総務局→総合政治政策局）を歴任し、現在は自治労本部副中央執行委員長（政治政策担当）。

●転換点となってきた〝静岡〟と自治研集会の歴史

自治研集会が初めて開催されたのは一九五七年のことで、山梨県甲府市に約一〇〇〇人が集まったといいます。自治労結成から三年後の出来事であり、「自治体は住民の要求にどう応えるか」をテーマに、地方財政危機の状況において、住民とともに住民参画による地方自治を考えていこうとしたのがはじまりでした。最盛期の一九八〇年代には七〇〇〇人を超す参加があったと聞いており、大きなうねりを感じます。

前回（二〇二〇年）開催された青森自治研は新型コロナウイルス感染症の影響により自治研集会として初めてのウェブでの開催を模索しました。今回の第三九回地方自治研究全国集会（静岡自治研）では、「やはり、現地で熱い議論を交わしたい」という強い要望と「遠隔地からでも気軽に集会参加したい」といった双方のニーズにお応えし、対面とウェブのどちらからでも参加することが可能な形式で開催いたします。

静岡での自治研集会は、二回目となります。静岡で初めて開催された一九六一年の第五回自治研集会では、「地域開発の夢と現実」というテーマを掲げ、高度成長期の地域開発に対し、「無条件に良いわけではない」という意見が出される画期的な集会となりました。

その中で報告された、四日市公害の実態調査を行った結果についてのレポートによって、ジャーナリズムが動き出すといった反響がありました。日本の地域開発の歴史は、四日市公害の問題が転機になったと言われています。

●「ごみの分別収集」は静岡発！

また、現在は全国の自治体であたりまえに行われている「ごみの分別収集」は一九七六年に沼津市の若手職員の発言をきっかけとした職場自治研活動からはじまったものです。それまで、家庭から出るすべてのごみは一緒に捨てられていましたが、缶やびん、古紙などの資源ごみを分別し、リサイクル業者に買い取ってもらうという画期的なリサイクルシステムを確立したこの取り組みは、その後、全国に広まっていきました。

この事例の着目すべき点は、取り組みがはじまった時の住民との協力関係にあります。当時職員だった方に話を伺ったところ、自治体がごみの『分別収集』を始めたのではなく、住民に『分別排出』をお願いし、住民の協力によって『分別排出』されたものを自治体で収集したにすぎないという考えで始まったと話してくださいました。ごみ処分地の設置問題で住民と自治体が対立していた中、住民に十分な理解を求めながら、住民との協働により実現したのです。

このような、自治研活動の歴史に残る素晴らしい事例が生まれたのも静岡の地でした。

第５回地方自治研究全国集会（前回の静岡自治研の様子）

四日市公害を告発したレポート

●自治研のルネサンスをめざして

このような歴史から、静岡は自治研活動をその節目において活性させてきた、まさに転換点であるとも言われています。その静岡の地で開催する第三九年次自治研集会は、自治研の再復興（ルネサンス）にふさわしく、地域に関わるみんなでこれからの地域や職場を考えていきたいという思いから「やらざあ、自治研ルネサンス！」をサブテーマにしています。

最後に、この静岡自治研を通じて、地域を守り、住民とむき合った公共サービスのあり方について、自治研活動の初心に立ち返りながら、みなさんと一緒に考えていきたいと思います。参加いただくみなさんには、静岡自治研集会においてさまざまな議論に参加し、発見をすることで、自治研を身近に感じてもらい、自治研活動参加につながるきっかけになれば嬉しく思います。